アンラッキーＢＯＹ

もかぱぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンラッキーＢＯＹ

【Ｎコード】
Ｎ０６６９Ｏ

【作者名】
もかぱぱ

【あらすじ】
だんだん怪しい展開になってきました（笑）

エピソード1　誕生秘話

この世には、どうやら【運のいい奴】と【運の悪い奴】２種類のタイプがあるらしい。
ボクがどっちのタイプかと聞かれたら、間違いなく後者だと答える。
ボクは、生まれてから１８歳になる今まで『運が良かった』と思える経験が一度もない。
その代わり『運が悪い』出来事は数えきれないほどある。
ボクの運の悪さは、１８年前…つまり、生まれた時からはじまった。

普通、赤ん坊は病院…しかも産婦人科で産まれるものだ。
もちろん、ボクだって病院で生まれた。
ただ、ボクが生まれたのは、病院は病院でも動物病院だった。
断っておくけど、ボクはれっきとした人間です。
もちろん、ボクが人間なんだからボクの母さんだって人間だ。

母さんは、ボクがお腹の中にいるとき毎日の散歩を欠かさなかったという。
これは、母さんがかかりつけの医者に薦められてのことだったようだ。
【ジョギング中毒】という言葉を聞いたことがある。
人間は、毎日ジョギングしていると、いつしかそれが中毒になり
雨だろうが雪だろうが走らずにはいられなくなるらしい。
母さんの散歩もそうだった。

母さんは、予定日の直前になっても毎日散歩に出かけていたらしい。
そして事件は起こった。
母さんは、予定日を明日に控えたその日もいつものように散歩に出た。

自宅を出て（当時、母さんは築５０年のボロアパートに住んでいた）近所の小さな公園を抜けて駅前の商店街に辿りついた時だ。
突然陣痛が起きた。そして母さんは、その場に倒れこんだ。
実は、そこから先の話は、母さんも覚えていないという。
だから、ここから先の話は、母さんを助けてくれた（？）商店街のおっちゃん&おばちゃんの談だ。

突然、商店街で一人の妊婦が倒れた。
最初に気付いたのは魚屋『魚辰』のおっちゃん（通称：辰っさん）だった。
辰っさんは、大きなお腹を抱えて苦しんでいる母さんを、発見し何を思ったか
店にあった巨大な台車（マグロが１匹乗せられるやつ）に乗せて３軒となりの惣菜屋に飛び込んだ。
その前に救急車だろ！と突っ込みたくなるが、辰っさん曰く「あの時はパニックで
そんなこと考えもつかなかった」という。
パニくった辰っさんが、苦しむ妊婦を台車に乗せて惣菜屋に飛びむと、それ以上に
パニくったのは惣菜屋『きむらや』のおばちゃん（通称：ミツコさん）だ。
辰っさんが、きむらやに助けを求めたのは明らかに誤算だった。
辰っさんとミツコさんは幼なじみでしかも同級生だ。
二人とも商店街の役員をしていて、やたらと気が合うのだそうだ。

「やだ、辰ちゃん！どうしたの！！」
「おい！ミツコ！この人、助けてくれ！うちの前で倒れてたんだ！」
「う…うまれるぅぅう！」（これは台車の上の母さん）
「お、おい！生まれるってよ！どうすりゃいいんだ！ミツコ！」
「え！そんなこと言ったって…あ、そうだ！辰ちゃん！医者だよ！

医者！」
「お、おお！そうか！医者だな！」
「そうだよ！すぐに医者に連れて行かなきゃ！！」
「き…きのした…病院に…」（母さん）
「え？何だって！？木下病院か！？」
「は…い…お願いしま…す…」
このとき母さんは、救急車でかかりつけの産婦人科『木下病院』へ搬送して
ほしいと頼んだつもりだったらしい。
が、パニくった同級生二人にはそんな母さんの願いを読みとることは出来なかった。
「辰ちゃん、木下病院だったらすぐそこだ！早く！」
ミツコさんの言葉に即された辰っさんは、きむらやを出て台車を走らせた。
そして辿りついたのが、きむらやの2軒先にあった【木下動物病院】だったという
わけだ。

そんなこんなで母さんが【木下動物病院】に運び込まれ、まぁ、これだけでも十分
不運な訳だが、更に追い討ちをかけるように母さんの陣痛が激しくなってきた。
きっとボクの運の悪さは母親譲りなんだな。
さすがの木下センセイも一度は断ったのだが、母さんの苦しむ様子を見て自分がこの
赤子を取り上げるしかないと覚悟を決めたらしい。
だが、センセイがこの決断をしたのには理由がある。
実は、このとき木下動物病院にたまたま愛犬の去勢手術のために来院していた客で
元助産婦だというおばちゃんが木下センセイに「ここで産ませまし

ょう！」と提案
したのだ。
そのおばちゃんの（余計な）一言で、木下センセイの医師魂に火がついた。

これが、母さんとボクにとって運が良かったのか悪かったのか…微妙なところだが、
一応ここも病院の一種なので一通りの医療器具が揃っている。（使う対象が違うけど…）
出産に関しては、毎日のように犬猫の出産を行っているのでその点では、木下センセイ
はまったくの素人ではない。
木下センセイと助産婦のおばちゃんは、力を合わせて何とか無事に出産を成功させ、
３千グラムのボクが無事誕生した。というわけだ。

産まれた赤ちゃん…つまりボクの泣き声が動物病院に響いた時、院内にいたスタッフ、
客、犬猫たちからも一斉に歓声があがったという。
助産婦のおばちゃんは、新しい命の誕生に感動のあまり号泣して愛犬の去勢手術を
取りやめる。と言ったそうだ。
この【珍事件】は、当時新聞やテレビのニュースでも報道されていた。
『動物病院で人間の男児出産！』このときの新聞を母さんは今でも後生大事に保管している。
こうして産まれたボクには、このあともう一つ不運が待ち構えていた。

ボクの名前だ。

命名『犬雄(いぬお)』

まったく有り得ない名前である。
もちろん、この名前はボクが動物病院で産まれたことに由来する。
そういえば、ボクの出産劇の件で父親の存在がなかったが、母さんがシングルマザーだった訳ではない。母さんには旦那…つまりボクの父親はちゃんといる。
ただ、あのころ父さんは、漁師をしていてマグロ漁船で遠洋漁業に出ていたのだ。
『犬雄』って名前を母さんが言いだしたとき、父さんに反対されなかったのかよ？と
母さんに問い詰めたことがある。
ボクが小学生の頃、『犬雄』という名前が格好のイジメの材料になり始めた時期だ。
自分の子供に『犬雄』なんて名前付ける親がいるかよ！とボクは母さんに詰め寄った。
しかし、母さんの言い分はこうだった。
「何言ってるの！父さんなんて【猫彦】にしたがってたのよ！それに比べれば…！」
ボクはそれ以上、母さんを責める気にはなれなかった。

エピソード2　ポチ

さっきも触れたが、ボクは小学生の頃、イジメをうけた。
と言っても、不登校や自殺を考えるほど陰湿なイジメではない。
『からかわれた』と言ったほうが正しいのかもしれない。
原因は、もちろんボクの名前だ。

【牛山犬雄】

これがボクのフルネームだ。
まったく信じられない名前である。
お笑い芸人でももう少しセンスのいい名前を付けそうなものだ。
小学生にとって、名前というのは格好のイジメの材料になる。
名前の中に動物が入っていたりすれば、子供にとってはそれをネタにしないほうが不自然なのだ。
ボクの名前には、不幸にも動物が2種類も入っている。

【牛】と【犬】
しかも、なんてメジャーなしょぼい動物なんだろう。
せめて『龍』とか『虎』とかもっと強そうな動物にして欲しかった。
牛と犬の二つでは、イメージ的に【牛】のほうでからかわれそうだが、
ボクが通っていた小学校では違っていた。
なぜなら、隣のクラスに学校一恐れられていたガキ大将がいて
そいつの名前が『牛島剛』といい、我が小学校では、【牛】を
からかうのはタブーとされていたのだ。
つまり、ボクは本当ならば運良く【牛山】という苗字でからかわれる

ことはなかったのだ。

しかし、ボクの名前にはもう1匹動物がいる。
【犬雄】の【犬】だ。
であれば、当然クラスメイトの標的はこの犬に向けられる。
そして、ボクのあだ名は『ポチ』となった。
母さんが犬雄なんて名前さえ付けていなければ、ボクは少なくとも名前でからかわれることはなかったのに…。
やっぱり不運だ。

ボクに『ポチ』というあだ名が付いたのは小学1年生の時で、これにも
ちょっとしたエピソードがある。
実は、ボクは最初からポチと呼ばれていた訳ではない。
あれは、1年生の後半くらいの時期だったと思うけど、それまで平和に
学校生活を過ごしていたボクにある日突然不幸が訪れた。
国語の授業で『犬』という漢字を習ったのだ。
このときに、クラスの誰かが「牛山くんの名前だ!」と叫んだのがきっかけとなり、そこから一気にボクの呼び名が
【うしやまくん】→【いぬおくん】→【いぬくん】→【いぬ】となった。
そう、確かはじめは【いぬ】と呼ばれていた。
それが、いつしか『柴犬』になり『チワワ』になってみたり、『ダックス』
になってみたり…『ブルドック』になってみたり…
もう訳が分からなくなってきた。

そんなある日、道徳の授業で先生が「動物をいじめてはいけません」と

いう話をした。
そのとき、なぜかクラス中の視線がボクに向けられた。

「え？ボク…？」

まぁ、とにかく、その日以来どういう訳か日替わりであだ名が変わること
がなくなり、『ポチ』で落ち着いたという訳だ。
この『ポチ』に決まったのは、そのとき学級委員をしていたやたらと正義感が強い
女の子が「犬山くんが可哀相だから、もっと可愛い名前を付けてあげようよ！」
と、動物愛護の精神からか…余計な提案をしてくれたおかげなのだが、今になって
思えばこれって感謝すべきことだったのかな。

ポチになる直前のあだ名が『ブルドック』だったし。

エピソード3　濡れ衣

『ポチ』ってニックネームもすっかり定着した小学４年生の頃の話だ。
あるとき、社会科の授業が突然自習になった。
緊急の職員会議があったらしい。
たまにあることだが、たいがいそんな時先生は課題を言い残して教室をあとにする。
今回もそうだった。
社会科の時間だったので、確かあの時出された課題は【どうすれば家庭のゴミを減らせるか】を考えろというものだった。
先生が教室をあとにして１０分間は、みんな真面目に課題に取り組んでいた。
そのうちに誰からともなくコソコソ話が始まる。それが、教室全体に感染しいつしか収集がつかなくなるほどの大騒ぎになってしまった。
ここでも、やたらと正義感が強い学級委員がみんなを静めようと声を張り上げたが、その行為が返って火に油を注いだ。

「うるせーんだよ！このいい子ぶりっ娘！」一人の男子が叫んだのだ。
まさかそんなことを言われるとは思ってもいなかったのか、学級委員の女の子がメソメソと泣き出した。
すると今度は、その子の親友（通称：ジャイ子）が男子に向かって「謝りなさいよ！」と凄んだ。
もちろん素直に謝る様なワルガキではない。
「うるせー！オトコオンナ」この一言が決定的な一言となった。
クラス中に怒号が飛び交って、もう自習どころの騒ぎではなくなっ

た。

だがそんな中、ボクを含め数人は、こういう状況の行き着く先を冷静に予測していた。
そろそろこの騒ぎを聞き付けて先生が怒鳴りこんで来るに違いない。
このクラス（４年２組）の担任は、今ではすっかり見かけなくなった熱血タイプの教師で、アツくなるとすぐ生徒に「愛のムチ（ビンタ）」を
お見舞いしたがる先生だった。

「あ～あ…こんなに大騒ぎして、こいつら全員先生にビンタだな…」
ボクは内心「早く先生来ないかな…」と、大騒ぎしている連中が先生に
ビンタされる姿を想像して一人でほくそ笑んでいた。
クラスの約半数がこのトラップに気付きもせず大騒ぎしている。

その時だった――

バン！！！

もの凄い音が響いて教室が一瞬「シーン」とした。
クラス中の全員がその音のした方向に注目した。
その視線の先にあるもの…それはボクだった。
先ほどの大騒ぎの最中、調子に乗った男子が『ジャイ子』に向かってなんと教科書を投げつけたのだ。
しかし、運悪くその教科書は途中で失速しボクの顔面に墜落した。
さっきのバン！という音は、ボクの顔面に教科書が激突した音だった。

まったくツイてない男というのは、重ね重ねツイていないもので、

ボクに
ぶつかった教科書は社会科の教科書だった。（社会科の時間だから当然か）
社会科の教科書は４年生の教科書の中では一番分厚い。
それがまともに中立国の、しかも民間人のボクの顔面にぶつかったのだ。
これには、さすがのボクもキレた。

「いってーなあああ！！この野郎！！」

ボクは、大声を出して立ち上がった。
そして、その教科書を投げつけてきた男子に向かって投げ返してやろうと
腕を振り上げた時だった。

「いま立ってるヤツ！全員廊下に出ろ！！」

――先生だった。

教室中に沈黙と緊張が走った。
ボクは、教科書を振り上げた右手をゆっくり下げた。
周りに目をやると、さっきまであんなに大騒ぎしていた兵士たちは、何事も
無かったかのように机に向かってイソイソと課題に向かっている（フリ）を
していた。
…な、なんて奴らだ。
どうやら、仕掛けられたトラップ…いや、地雷をまんまと踏んづけたのは
ボクのほうだった。

そのとき、ボクと同じように運悪く立ちあがっていたのは、ボクのほかにも
４人いた。
そのうち3人は、女子だ。例の学級委員長とジャイ子、それとその取り
巻きの女子が1名。
「女子は座ってよし！」
先生は、これまた理屈に合わない許可を出した。
残るは僕ともう一人…そう、教科書を投げつけてきた真犯人のアイツだった。

「せ、センセイ！ボクは違います！」
ボクは、震える声で弁明した。
「うるさい、いいわけするな！廊下に出ろ」
先生は、そういうとさっさと廊下に出てしまった。
渋々と先生のあとに続き、ボクたちは廊下に出た。
「そこに並べ」先生は、鬼軍曹の形相でボクたちに命令した。
こうなると下手な言い訳はかえって状況を悪化させる。
ボクは覚悟を決めた。
まず、真犯人の男子の左ほほに先生の平手が思いっきりヒットした。

その拍子に、その男子が真横に吹っ飛びボクと頭と頭が激突した。
痛って！！！
泣きっ面に蜂とはこのことだろうか。
先生のビンタの前にコイツにまで頭突きされるとは…。
先生は、そんなことお構いなしに「ポチ！歯をくいしばれ！」とボクの左ほほ
にも強烈な平手打ちをお見舞いしてきた。
ボクは、この先生にビンタされるのは2度目だった。

前回もこんな感じだった。

ある日、国語の授業で漢字の書き取りテストがあった。
ボクは、漢字が大の苦手だった。
ボクが『ポチ』なんてあだ名を付けられたきっかけが『犬』って漢字を授業
で習ったことだったから…というのは言い訳だろうが、とにかくボクは漢字
テストが苦手だった。
それがどういう訳かあの時の漢字テストは調子が良かった。
たまたま前の晩に読んでいたマンガの主人公の名前に使われていた漢字が
いくつも出題されたからだ。
テストは全部で２０問あったが、ボクは珍しく半分も回答することができた。
しかも、そこそこ自信がある。もしかすると、これは…と期待したボクが
甘かった。

二日後、ボクは先生に呼び出された。
いや、呼び出されたのはボクだけじゃない。
全部で１０人だ。
場所は『理科準備室』理科室の隣にある小さな部屋だ。
実験に使う用具などがガラス棚の中に並んでいる。
ボクたちは、なんでこんな所に呼び出されたのか訳も分からず部屋に入った。
最後の奴が部屋に入ると、すぐに先生はドアを閉めて、代わりに口を開いた。
「なんで呼び出されたか分かるか？」

ボクたちには何のことかさっぱり分からなかった。
…と思っていたのは、ボクだけのようだった。
この重苦しい雰囲気に耐えきれずか、何人かがベソをかきはじめたのだ。

――え？

なに？

なんで泣いてるの？

先生の表情は、はじめのうちは鬼軍曹のそれだったが、何人かがベソをかき
はじめると今度は悲しみの表情を浮かべた。
「そうか…どうやら分かっているみたいだな」
先生は目を閉じてウンウンと頷いた。
え？いや…すいません。ボクには分かりませんけど。
そして先生はゆっくりと続けた。
「泣いているということは、お前ら反省してるんだな？」
は、反省？ますます分からない。なんのことだ？
嫌な予感を感じたボクが口を開こうとした時だった。

「おい、ポチ。ところでお前は泣いていないが反省しているのか？」
先生からの先制パンチだ。（決して洒落ではない）
ボクは思わず「…反省ですか？」と呟いた。
気がつけば、呼び出された１０人のうちベソをかいていないのはボクだけに
なっていた。
ボクの問いに、先生の表情がみるみる鬼軍曹に戻った。
「貴様ぁ！ふざけるのもいい加減にしろー！」

そしてボクは（ボクだけ）先生に往復ビンタを喰らったのだ。
あとで聞いた話だが、あの時呼び出されたボク以外の９人は、漢字テストで
なんとカンニングをしていたそうだ。テスト中、先生の目を盗んで答えを
書いた小さなメモを回していたらしい。
そのメモには全２０問のうち１０問の答え（漢字）が書かれていたそうだ。
しかも、その１０問というのがボクが実力で回答した１０問とビンゴだったのだ。
なんという偶然。
これでは、先生がカンニングを疑うのも無理はないのかもしれない。

ボクは我ながら自分の悪運に関心した。

エピソード４　プレミアムな１００円玉

中学生になったボクは、随分と身長が伸びた。
六年生の頃はクラスで背の順に整列すると前から数えたほうが早かったのだが、
小学校卒業と同時にグングンと背が伸びて、気付けば学年で一番背が高くなって
いた。
そうなると、今まで『ポチ』だの『チビ』だの小馬鹿にしていた同級生もボクに
一目置く様になった。
とは言っても、あだ名が『ポチ』から『ポッちゃん』に変わっただけなのだが…

ボクは中１の夏にバスケ部に入部した。
もちろん希望して入部した訳ではない。
ボクのクラスの担任がたまたまバスケ部の顧問で、『背が高いから』
それだけの
理由で半ば強制的に入部させられたのだ。
そしてボクの中学生活３年間はバスケに明け暮れて終わることになる。
もちろん夏休みなんてない。毎日練習だ。
中１の夏休み――。
同級生は毎日プールやレジャーで夏休みを満喫していた。
ボクはというと、毎日毎日体育館でボールを追いかけ回している。
夕方、練習が終わると帰宅途中のコンビニで『ガリガリ君』を買って、かじり
ながら帰るのが唯一の楽しみであり、それが日課となった。

ある日、いつものようにガリガリ君を買うためいつものコンビニに立ち寄った。
そしていつもの様にガリガリ君（ソーダ味）を手に取り店員の前においた。
「今日も練習？」すっかり顔馴染みになった店員のおばちゃんが声をかけてきた。
お互い顔馴染みではあるが、そこで愛想よく世間話をするほどのスキルを中１の
僕はあいにく持ち合わせていなかった。
「あ、はい…」とだけ、ぶっきらぼうに答えて五百円硬貨を一枚差し出した。
おばちゃんは、「毎日暑いのにエライねぇ」と笑顔でお釣りを返してきた。
これにもぎこちない笑顔で釣り銭を受け取り、財布に仕舞おうとしたときだった。

――あれ？
何となく違和感を感じたボクは手のひらの小銭に目をやった。
「なんだ、これ？」
明らかにおかしな１００円玉が１枚、手のうえで鈍く光っているのをみつけた。
おかしな、といっても色も形も大きさも１００円玉とほとんど変わりがない。
ちゃんと『１００』って書いてあるし…でも…

「あ、その１００円！」

先に気付いたのはおばちゃんだった。
「お兄ちゃん、その１００円玉、昔の１００円だよ！」
そうなのか、どうりで古臭い感じが…

「はぁ、むかしの…ですか？」
「そうそう！珍しいわね～。あ、でも１００円は１００円だから今でもちゃんと
使えるから大丈夫よ！」
「そうなんですか」
「そうよ。それにしてもお兄ちゃんラッキーね。それプレミヤがつくかも
しれないから大切に取っておいたほうがいいわよ」おばちゃんが得意げにいった。
それを言うなら【プレミヤ】じゃなくて【プレミア】だろ。

てか、こんなもんに価値なんかあるのだろうか？
そのときボクの後ろにレジ待ちの客が来たため、おばちゃんに軽く頭を下げて
すぐに店をあとにした。

そして、その日の夜――
母ちゃんと二人での夕飯を済ませ、風呂に入りリビングのソファーでテレビを
見ているとき、ふとその１００円玉のことを思い出した。
（ちなみに父ちゃんはというと、この頃はマグロ漁師は廃業し、居酒屋で板前を
していた。）
「なあ、母ちゃん」
「んん～？」母ちゃんは、風呂上がりの顔にキュウリの輪切りをペタペタ貼り
付けている。しかし、その顔の約３分の１はキュウリじゃなくてニンジンだ。
どうやら途中でキュウリが足りなくなったらしい。
そういえば、さっき冷蔵庫をガサガサしながら「これでいいか」っ

て独り言が聞こ
えてきた。
「あに（なに）よ～？」母ちゃんは下を向くとキュウリが落ちるので天井を見ながら返事した。
「今日さぁ、お釣りでこんなもん貰ったんだけど…」
ボクは、例の古銭をテーブルの上に置いた。
下を向けない母ちゃんは「んあ～？」と言いながら、ボクがテーブルに置いた古銭を
手探りで探し当て顔の前に持っていった。
「それ、いま幾らくらいの価値あるんだろう？プレミア付くかな…」
母ちゃんにそんな知識があるとは思えないが、ボクは一応聞いてみた。

しかし、母ちゃんは以外にも即答してきた。
「１０円くらいじゃん？」
――え？　なにを馬鹿な。
「なに言ってんだよ、１０円の訳ねーじゃん。それ、古いけど１００円だし。」
ボクは思わず苦笑いした。やっぱ母ちゃんに聞くだけ無駄だったようだ。
コンビニのおばちゃんは、確かに１００円は１００円だからっていっていた。
最低でも１００円の価値はあるだろう。そんなのボクにだってわかる。

え～、だって…
母ちゃんが、１００円玉をクルッと裏返すと同時に顔のキュウリが
１枚ポロっと
落ちた。

『これ、１００ウォンでしょ？』

今の相場だと、たぶん１０円くらいだよ。

母ちゃんの手からボクは１００円玉を奪い取った。

確かに、良く見れば【１００】の下に小さなハングル文字が刻まれている。

それから、しばらくの間、ボクがあのコンビニに行かなかったのは言うまでもない。

やっぱりボクはツイてない男だ。

エピソード5　後悔役に立たず

バスケの練習で明け暮れた中学生活も、残すところあと半年あまりになった
中3の秋のことだ。

校庭の大イチョウの樹がだいぶ色づいてきた。そして、ボクの周りの友達も
すっかり色気づいた。みんな、競うように彼女を作り残り少ない義務教育を
悔いのないものにしようと必死だった。

ボクはというと、残念ながら【恋愛】とは全く縁がない生活を送っている。
といっても、恋愛とは『縁がないだけ』であって、女っ気がない訳ではない。
ボクの中学には、もちろん『女子バスケ部（通称：女子バス）』も存在する。
ボクが2年の頃までは、男子バスケ部と女子バスは体育館を曜日や時間で
シェアしていたため男女バスケ部が顔を合わせることはほとんどなかった。

しかし、ちょうど1年ほど前、女子バスの顧問が身体を壊し退職したため
急きょ男子バスケ部の顧問の先生が、女子バスの顧問も兼任することになった。
そして、これを機に…ということで、男女バスケ部が合同で練習をするよう

になったのだ。

このことが、ボクの【汗臭いだけ】だったはずの中学生活のラストシーンに
少しだけ色を付けてくれることになる。
ボクは、3年になると男子バスケ部のキャプテンに任命された。
部の中で一番長身だったということもあるのだろうが、先生が言うには
「犬雄が一番後輩から慕われているから…」という理由らしい。
まぁ、確かにボクは後輩連中とよく馬鹿騒ぎをして遊んでいる。
慕われている、というよりは同等に見られてるだけのような気がするが…。

理由はどうであれ、ボクは一応男子バスケ部のキャプテンな訳で、
そうなると
当然、合同で練習することになった女子バスとの色々な調整役も任されること
となる。
ボクは、これまでクラスメイトも含めまともに女子と口を聞いたことがない。
そんなボクが女子バスとの調整役だなんて…荷が重かった。
でも、そう思うのはボクだけでは無かったようで、女子バスのキャプテン
白石真帆も同じようなものだった。
白石真帆もボク同様、バスケ命で3年間を過ごす覚悟でいた女だが、
突然男バスと
合同練習することになり彼女も内心舞い上がっていたようだ。

白石は、体育部の女子にしては珍しいロングヘアーで、バスケをやる時はその長い

髪をポニーテールに束ねているのがトレードマークだ。
はっきりいって、顔も可愛くて彼女のファンは実に多い。
同級生の男子で、白石にコクったという話を何度か聞いたことがある。
ところが、この白石…男子に興味がないのか、それともバスケ命なのか…

コクられた男子をことごとくフッている。というか、コクった男子がことごとくフラれている。といったほうが正しいのかもしれない。
同じバスケ部、しかもキャプテン同士ということでボクは白石と話す機会が多くなった。
はじめのうちは、お互い意識し合っていたのか（白石の方はどうだか知らないが）うまく話がかみ合わなかった。だが、それも2週間が過ぎた頃にはごく自然に会話が出来るようになっていた。
ボクと白石は、実は家も近かったため練習のあと一緒に帰ることも多くなった。

白石は、女子バスケ部のキャプテンをしているくらいなので、もちろん背は高い。
といってもボクに比べれば肩までしかないのだが、女子の中ではその長身は群を抜いている。
それにプラスしてロングヘアー&ポニーテールだ。
中3ながらにして、白石はモデルのようなスタイルの持ち主だった。
そしていつしか、ボクはそんな白石に惹かれていった。
その白石がボクのことをどう思っていたのか…。

ボクは思わぬことがきっかけでそのことを知ることとなる。
引退試合を間近に控えたころ、ボクと白石はイイ感じだった。
といっても、もちろん恋人同士になった訳じゃない。
相変わらず練習のあと家までの帰路を二人一緒に帰る。ただそれだけのことだ。
『イイ感じ』というのは、その一緒に帰る回数が増えたということだ。
というか、ほぼ毎日ボクと白石は一緒に帰るようになっていた。

白石の家は、ボクの家よりも少しだけ学校から遠い。
ボクの中学校は、通学距離が５ｋｍ以上の生徒は自転車通学が認められている。
ボクの家は学校から４．８ｋｍ
わずか２００メートル足りずに徒歩通学となった。
この『自転車通学５ｋｍ以上ルール』にもボクの運の悪さが現れている。
もちろんボクの他にも徒歩通学の生徒は大勢いる。だが、そのほとんどは学校の
すぐ近くの地区に住んでいる。
全員、学校から半径２ｋｍ以内だ。歩いてもたいした距離じゃない。

そして、問題の５ｋｍライン付近の生徒はというと、これがなんとボクしか
いないのだ。学校から半径２ｋｍ～４．８ｋｍの範囲にあるのは川や畑や田んぼ
だけで、そのエリアには民家がほとんどないのだ。
（ガリガリ君のコンビニはあるけど）
せめてラインを４ｋｍに縮小してくれればボクだって自転車で通学できたのに…。

話が脱線したが、白石の家はボクの家から５００メートルほど遠い場所にある。
もちろん『チャリンコ組』だ。
ボクが白石と一緒に帰る時、白石は自転車を押してボクと並んで歩いている。
その間、ボクたちはいろんな話をした。
もっぱら話題の中心はバスケのことや進路のことなど…今にして思えば中学生
らしい可愛い会話だったな、と思う。
でも、そんな他愛のない会話がボクたちにとっては楽しくて仕方なかった。
そしてボクは、心に決めた。
引退試合の前までに白石に告白しよう…と。

その日から、ボクは毎日、白石に告白するタイミングをうかがっていた。そのせいで
白石との帰宅途中の会話も上の空になりがちで「ねえ、聞いてるの？」と怒られる
ことがたびたびあった。
だが、ボクには告白する勇気がなかなか出なかった。もしフラれてしまったら、もう
一緒に帰れなくなる。そんなことを考えるとつい言いそびれてしまうのだ。

そんなある日、いつも通り練習を終えて白石のことを正門で待っていると、ポニー
テールを揺らしながら白石が走り寄ってきた。
なぜか、いつものように自転車を押していない。
「ごめん、今日は真奈美と帰るから…」

じゃ、おつかれ！そう言い残して白石は体育館に戻っていった。
『真奈美』とは女子バスのマネージャーをしている子で、白石とはクラスも一緒の
親友だった。
そう言われれば、恋人でもないボクには引き止める権利もない訳で、おとなしく
一人でトボトボと帰ることにした。

久しぶりに行くか…と、例のコンビニに立ち寄って肉まん（寒かったので）を買い
店を出たときだった。
「よお、犬雄」バスケ部3年の大島勇太（通称：ゆうちゃん）に声をかけられた。

ゆうちゃんは、パワーフォワードという、名前の割にはバスケでは地味なポジション
を受け持っているが、リバウンドしたボールを処理する技術は天才的で1年の頃から
ずっとレギュラーだった男だ。

「あれ？今日は一人？」ゆうちゃんが不思議そうに聞いてきた。
（実はバスケ部の中では、ボクと白石は付き合っていると思われていた。）
「うん、なんか真奈美と話があるらしい」引退試合も近いしな…と付け加えた。
そっか、ところでさ…
そう言うゆうちゃんの顔がニヤニヤしている。嫌な予感――
「お前と白石ってどこまでいったの？」
――付き合ってるの？と聞かれることを覚悟していたが、ゆうちゃんの質問は、その

3段階上をいっていた。原爆投下だ。
パワーフォワードって意外と積極的なのね。

「ハア！？なに馬鹿なこと言ってんだよ！俺たち、付き合ってもねーよ！」
ボクは慌てて言い返した。思わず持っていた肉まんを落としそうになった。
え？そうなの～？と、ゆうちゃんは拍子抜けしたような声を出した。
残念ながら、そうなんだよ。
と、声には出さなかったがいまだに告れずにいる自分を呪った。
「でも、好きなんだろ？」
ゆうちゃんの原爆投下は止まらない。
「あ…うう…」こういう時は何て答えたらいいのだろう？
恋愛経験ゼロのボクには、脳ミソ内の引き出しを全部引っ張り出しても適当な
言葉が見つけられない。
てゆーか、もともとボクの引き出しには「恋愛」というカテゴリは存在しない。

そして、ようやく最後の引き出しの奥深くにあった言葉を見つけ出し、その場
しのぎでこう答えてみた。
「す…好きじゃねーよ！あんな女…」
もちろん本心ではない。本心の訳がない。

男という生き物は、まったく馬鹿な生き物だ。
どうしてこういう時に素直になれないのだろうか。
いや、男が馬鹿なのではないのかもしれない。ただ単にボクが馬鹿だったのだ。
そのとき、背後から聞き慣れた声が聞こえてきた。

ボクは今度こそは本当に持っていた肉まんを地面に落としてしまった。

その声の主は白石真帆だった。
白石が何て声をかけてきたのかは聞き取れなかったが、つぎの言葉ははっきりと
聞きとれた。

「大島くん、一緒に帰ろ。」

ボクは耳を疑った。
白石は、たしかにゆうちゃんに向かって「一緒に帰ろ」と言った。
「あ…あわわわわ…あわわ…」
ボクは、あの時きっと世界で一番まぬけな顔をした中3だったに違いない。
こんな時、こんな時こそどんな言葉を吐けばいいんだろう？
さっきの引き出しをもう一度全部チェックしたが、そんな調子のいい台詞が
見つかるはずがない。
「う…うううう…」ボクの口から出た言葉は「あ」から「う」に変わっただけ
だった。
そんなボクの真横を白石がすぅ～っと通り過ぎた。ポニーテールが風に揺れている。
白石はボクの存在がまるでそこに無かったかの様に、ゆうちゃんに向かって言った。
「さ、早く行こ！」白石が自転車を走らせた。
「あ、ああ…」ゆうちゃんも、白石に続いた。ゆうちゃんもチャリンコ組だ。
ゆうちゃんが、ボクをチラチラと振り返っている。

白石はまっすぐ前を向いて自転車をこいでいる。
そして二人の姿が見えなくなった。

ボクはその場に立ちすくんだ。

どのくらいの間、そこにいたのか覚えていないが、しばらくすると
前方から1台の
自転車が近付いてきた。
白石だった。
白石とゆうちゃんの帰り道は、途中まで一緒だがこの先の交差点で
左右に分かれる。
白石はそこでゆうちゃんと別れてから引き返してきたのだろう。
なんだ…悪い冗談かよ。
って、一瞬ほっとしたが、それは大きな勘違いだった。
白石は、ボクの前で自転車を停めた。ボクのことを睨んでいる。
「し、白石…あ、あのオレ…」そのとき、ボクの言葉をさえぎって
白石が言った。
「【あんな女】で悪かったわね！今まで一緒に帰るの苦痛だったで
しょ、ごめんね！」

そこから先のことはあまり覚えていない。
気付いた時には白石の姿は消えていた。
ボクは、へなへなとその場にへたり込んだ。
目の前には食いかけの肉まんが転がっている。
ボクは、白石と肉まんを同時に失っていた。
あ、失ったと言っても白石はもともとボクのモノではなかったか…。

その翌日、ボクはある人に呼び出された。
真奈美だ。
真奈美は、ボクの顔をみるなり大声を張り上げた。

「あんた、真帆のことからかってたの！？」
「からかってた？」
「そうよ！毎日一緒に帰ってたじゃない！その気がないなら思わせぶり
なことしないでよ！真帆がかわいそうだわ！」

あ、あの…それは、どういうことでしょうか？
もしかして、そういうことですか？
そういうことだったんですね…。
そう、実は白石もボクのことを好きだったらしい。
昨日、白石が真奈美と話があるからと言っていたのは、いつまでも告白
して来ないボクのことを相談していたそうだ。
そして、それならばと白石の方から告白するということになり、ボクの
ことを追いかけたらあの言葉を聞いてしまった。

【好きじゃね～よ、あんな女】

ボクは後悔した。
一生分の後悔をした。
でも、もう今更ジロー（古いか）だった。
さらに次の日、白石からメールが来た。

「あたし、大島くん（ゆうちゃん）と付き合うことになったから」

まったく、女という生き物はこれだから理解に苦しむ。
それにしても、ゆうちゃんはさすがだ。
リバウンドを処理するのは天才的なのだ。

エピソード6　進路決定

引退試合も終わり、ボクたち3年生は本格的に進路のことを考えなくては
ならなくなった。
白石とゆうちゃんは、あれからラブラブモード全開で二人で同じ高校を受験
することにしたようだ。
そして、ボクはというと…ボクは実のところ進学なんてまったく頭になかった。
ボクは、幼い頃から父ちゃんに「お前は立派なマグロ漁師になるんだ」と言われ
続けてきた。ボクもそのつもりだった。
だから（というのは言い訳かな）勉強なんてちっともしなかった。
漁師は体力勝負だからと、勉強よりもバスケに命をかけてきた。
そのおかげで、バスケに関してはこの辺りではちょっとした有名人になっていた。
正直、バスケの強豪校で知られる高校からスポーツ推薦の話もいくつかあった。
でもボクは、『漁師になる』と言い続けていた手前、親には進学するなんて
一度も言ったことがなかった。

ボクは、小学生の頃から将来の夢を『マグロ漁師』と言っていた。
友だちは、宇宙飛行士だとか総理大臣だとか弁護士だとか、現実離れした
夢を語っていたが、ボクの漁師になる夢は『夢』ではなく『現実そのもの』
だった。でも、そんなボクの夢を父ちゃんが無残にも打ち砕いた。

ある日のこと、いつものようにボクと母さんは二人で夕飯を食べていた。
「ねえ、犬雄…」
「んん？」
「あんた、進路どうすんのよ？」
「どうするって、漁師になるって言ってんじゃん」
「・・・・」
「なんだよ、不満なのかよ」
「あんた、それ本気で言ってるの？」
「当たり前だろ。父ちゃんだって、昔からそう言ってただろ」
「あのね、犬雄…」
「なんだよ」
「父ちゃん、いま仕事何やってるか知ってる？」
「はあ？だから、漁師に戻ったんだろ？」

そう、父ちゃんはマグロ漁師をしていたが、あるとき時化（しけ）の日に漁に出て濡れた甲板で転倒し肋骨を5本折る大ケガをした。
それがきっかけで、漁師を廃業し居酒屋の板前に転職した。
だが、ケガが治るとすぐに漁師に復活して、ほとんど家には帰らなくなっていた。
今はまたどこかの海でマグロを追いかけているそうだ。
今度家に戻るのはいったいいつになるのか…

「実は、お父ちゃんね…」
母さんが箸を置いた。

「え？なんだよ」
「お父ちゃん、実は漁師に戻らなかったのよ」

というか、戻れなかったって言うのかな…と、母さんはうつむきながら呟いた。
「はあ！？どういうことだよ！」
じゃあ、父ちゃんは今どこで何やってんだよ。
「うん、あのね…」
母さんがゆっくりと話をはじめた。

母さんの話は、つまりこういう事だ。
実は、父ちゃん…大怪我をして漁師を辞めたあと、知り合いの紹介で居酒屋の
板前をしていた。
だが、根っからの漁師だった父ちゃんは、どうしても漁師という仕事を諦め
きれなかったようで、怪我が完治すると同時に板前を辞めてしまった。
漁師に戻るためだ。
ここまでが、ボクが両親に聞かされていた話だ。
しかし、現実はちょっとばかり違っていた。

父ちゃんには乗る船がなかったのだ。
もともと船は父ちゃんの持ち物ではなかった。
組合員で共同所有していた船だった。
父ちゃんは、漁師仲間にもう一度船に乗せてくれるよう頼んだ。
しかし、誰も首を縦にふることはなかったという。
その本当の理由を、父ちゃんは知らない。
いや、知っていて気付かないフリをしていたのかもしれない。と母さんは言った。
あの日――そう、父ちゃんが大怪我をした日…
海は大時化（おおしけ）だった。
仲間たちはみんな漁に出るのは反対だった。

だが、その頃船長をしていた父ちゃんは、「大丈夫だ！これぐらいのしけで怖気
づきやがって！」と半ば強制的に船を出してしまった。
父ちゃんはそういう男だ。
そして案の定、高波に遭い船は転覆しかかった。
そういえば、父ちゃんの見舞いに行ったとき、怪我をしたのが父ちゃんだったのが
不幸中の幸いだ。と、母さん言ってたっけ。
とにかく、あの一件で父ちゃんはすっかり漁師としての自信を失ってしまい、
仲間たちを危険にさらしてしまった責任をとり漁師を廃業したのだ。
そんな父ちゃんが今更、「また船に乗せてくれ」なんて頼んでも、
誰も受け入れては
くれなかった。
つまり父ちゃんは『嫌われ者』だったのだ。
そして、そんな父ちゃんはすっかり落ち込んで漁師に戻ることを諦め…てくれれば
良かったのだが、こんなことでへこたれる男ではなかった。

へこたれはしなかったが猛省はした。
「俺は漁師という仕事を舐めていた。イチから出直す！」と母さんに宣言した。
漁師をイチから出直すために父ちゃんがしたこと、これがとんでもない方向に我が家
を導くこととなる。
父ちゃんは、『もう一度漁師を基礎から学びたい』と、漁師の学校に通うと言いだした。
「ちょっと待ってくれ、母さん！漁師の学校なんてあるのか？」
ボクは思わず母さんに聞いた。そんな学校があるならボクだって進路をそこにしたい。

「そんなもん、あるわけ無いでしょ。」母さんはあっさり答えた。
「でも、父ちゃんはそう言ったんだろ？漁師の学校に行くって」
「そうなのよ。」実はね…と、母さんが複雑な表情を見せた。
「お父ちゃんね…その『漁師の学校』を見つけてきたのよ」
「見つけてきた…？」
「…そ」
「りょーし、の、がっこう…を？」
「…うん。それが…ね」
「なんだよ」
「お父ちゃん、間違えて…」
「まちがえ…て？」
「りょーしの学校じゃなくて」
「じゃなくて？」

「りょーりの学校だったの…」

「……え？　いま、なんと？」
「だから～、りょーしじゃなくて、りょーり！」
「……えええ！！！」

どうやら、父ちゃんは【漁師の学校】を必死で探して、ついに見つけたのだ！
だが、それは【漁師】じゃなくて【料理】の学校だった。
『し』と『り』…わずかな違いだった。実に惜しい…か！
そんな馬鹿なことがあるわけないと思われそうだが、こんな馬鹿なことが
起きるのが我が『牛山家』なのである。
父ちゃんがその間違いに気付いたのは願書を出しに行った時だった。
だが父ちゃんは、その時、せっかくだからと言って料理学校の体験入学とやらを

させてもらったということだ。
そこで父ちゃんはカルチャーショックを受けた。
『この学校には若いお姉ちゃんがいっぱいいる。』
そう、父ちゃんは生粋の【女好き】なのである。
そして、めでたく父ちゃんの『料理学校』入学は決定した。

このことを、父ちゃんは母さんに『犬雄には絶対に言うな』と念押ししていた。
母さんは母さんで『こんな馬鹿なこと言えるか！』と切り返したらしい。
まあ、とにかくうちの親は揃いも揃って変人だ。
で、問題の父ちゃんだが、だからと言って家に帰ってこないという理由がボクには
分からない。
それについて母さんに問うたら、答えは意外と簡単なことだった。

「学校の近くにアパート借りて住んでるわよ」
あ、そ。そんなことでいいのか…牛山家。
「学校の近くのアパートって…その【料理学校】ってどこにあんだよ」
「旭日駅から徒歩1分」
――となり街にある駅である。
「めっちゃめちゃ近ぇ～じゃんかよ」
「そうよ」
「じゃあ家から通えばいいじゃん」

「朝がツライんだって…」
漁師が言うセリフとは思えない。父ちゃん、漁師辞めて正解だわ…。
そのとき、我が家の電話がリンリンと鳴った。
母さんは電話を取ると「うんうん」と短い返事をしてからボクに受

話器を差し
出してきた。
「なに？おれ？」
「うん」
「だれ？」聞かなくても何となく分かった気がした。
「シェフ」
やっぱりだ…

「おう！犬雄か！」久しぶりだなぁ、と父ちゃんは呑気な声を出した。
「久しぶり～、じゃねーよ！」
「なんだよ、ずいぶん機嫌悪いじゃねーか」
「いま、母さんに全部聞いたよ」
「…き、聞いたって何をだ？」
「父ちゃん、料理人になんのか？」
「あ・・・バレちったか？」
「まったく、何やってんだよ？」
「まあまあ、いいじゃね～か！犬雄…それよりなぁ」
「あんだよ！」
「お前の進路のことだけどな」
「ああ、尊敬する父親（もちろんイヤミ）のあとを継いで漁師になろうと
思ってたのに、その父ちゃんは知らぬ間に料理人を目指してるなんてな…」
「まぁ、そう嫌味を言うなって…」
嫌味って気付いたか。
「で、なんだよ？」
「ああ、お前の進路のことだけどな…お前はどう考えてるんだ？」
「どうって…だから…」つい5分前まで漁師になることしか考えていなかった

ボクだったが、今はもうそんな気は０％になっている。
「わかんね～よ」これが今のボクの率直な気持ちだった。
「そうか…やっぱり、何も考えてね～んだな」オマエが言うか！お前が！
「バスケで推薦とれそうだから高校行こうかな…」
この言葉を聞いて父ちゃんが声色を変えた。
「お！おい…犬雄！早まるな！高校なんて行ったら勉強しなきゃならないんだぞ！」
もちろん、そのつもりだ。あんた、親のくせにナニ言ってんだ？
「早まるなって…高校に進学すんのが何で早まることなんだよ」
「ちょっと待て！犬雄…実はな…」父ちゃんの鼻息の荒さが受話器を通しても
伝わってくる。
「なんだよ」
「…うん、母さんに変わってくれ」なんなんだよ！いったい。
ボクは無言のまま母さんに受話器を渡してすっかり冷めきった食事を再開した。
母さんは、さっきと同じように「うんうん…」と小さく頷きながら父ちゃんの話を
聞いている。
だが、しばらくすると「…えええええ！！」と突然大声をあげた。
ビックリしたボクは思わず味噌汁を噴き出した。
「アタシもーー！？」母さんが素っ頓狂な声を出した。
いったいこの夫婦、何を話してるんだ？
冷静さを取り戻した母さんは、声のトーンを落として再び「うんうん…」と返事
している。
そして「…わかった」と何かを受け入れてから電話を切った。
「なんだよ。父ちゃん何だって？」ボクは二人の会話が気になって

仕方なかった。
というか、嫌な予感がしてならなかった。
「あのね…犬雄…」
「うん」
「お父ちゃんね…あんたの願書を出しといたってさ」
…はい、お母さん質問！ボクの願書って、それはいったい…
「願書って…なんのことだよ」
「だから～、お父ちゃんが行ってる料理学校の入学願書よ！」
はあああああ！？

「何でオレまで料理学校なんか行かなきゃなんね～んだよ！」
まったく信じられないことだった。
親が勝手に子どもの学校決めるか？…普通。しかも料理って…
「冗談じゃねーよ！だいいちオレ、料理なんかしたことねーし！」
「そうよね…。あたしも料理は苦手だわ」
いやいや、そういうことが言いたい訳じゃなくて…
「料理人なんて興味ないよ！」
「お父ちゃんも最初はそうだったって…でも今はすっかりハマってるわ」
父ちゃんは『お料理教室』気分だろ！
ボクの場合は進路なんだ。一緒にするな。
「やだよ！絶対にやだ！だいたい何が悲しくてオヤジと同じ学校に通わなきゃなんね～んだよ！」そんな話、聞いたことがない。
「大丈夫よ」母さんは不敵な笑みを浮かべた。
「なにがだよ」

あんたは定時制のほうだから…

もうどうにでもなれ。

こうしてボクは料理の専門学校に入学することとなった。

あ

そういえば

「母さん、さっき電話で『アタシも～』って言ってたけど、まさか…」

まさか…まさかな。

「うん」

母さんが、また不敵な笑みを浮かべた。不気味な笑みと言うべきか。

「アタシも行くことになった。」

こうして我が家は、一家三人が学生となった。

エピソード7　我が家の家計事情

「犬雄、宿題やったの？」

ボクが料理の学校に入学してから数ヵ月後、これが母さんの口癖となった。

「ああ、やったよ」

「ホントに？サンキュ！」母さんの宿題の話である…。

いつの間にか、母さんの宿題はボクがやるのが日課になっている。

その理由は3つ。

まず、ボクには昼間たっぷりと時間がある。

なぜなら、ボクは【調理技術専攻科】の定時制クラスに通っているからだ。

それともう一つ、母さんが宿題をやる気がまったくないからである。

「だいいち、なんで料理の学校に宿題なんてあんのよ」

母さんは毎日のように愚痴をこぼすが、愚痴を言いたいのはボクのほうだ。

「いいじゃんかよ。どうせ母さんはやらないんだから」

ボクはそう言いながらテーブルの上に課題のレポート用紙を置いた。

ちなみに、母さんは【パティシエ科】の一年生である。

もちろんこれも父ちゃんが勝手に決めたことだ。

母ちゃんは『スイーツ好きなだけ食えるぞ』の一言で簡単にだまされて

素直に入学した。

「どーせ、あんたは昼間ヒマなんでしょ？いいじゃない」

ヒマで悪かったな…

ボクだって好き好んで定時制なんかに通ってるわけじゃない。

てゆーか、好きで料理の学校なんかに通ってるわけじゃない。

父ちゃんが勝手に決めてきたせいだ。

だいいち、仕事もしてないボクがなんで定時制に行く必要があるのさ？

……え？

まさか

「ねえ、母さん…」

「え？なあに？」

「父ちゃんがボクのこと定時制に入学させたのって…」

「うん？」

「ボクに、昼間は働けってこと？」

そうなのか？そうなのか？そうなのか？

そういえば、今まで何で気付かなかったんだろう？

我が家は、今や親子3人全員が【学生】なのである。

ということは…

誰一人として仕事をしていないのである。

いったい、この家の収入源はどうなってるんだ？

ボクは急に心配になった。

昔からノープランな人生を送ってきたボクの両親だが、さすがに誰も仕事をしてないってのはヤバイだろ。

授業料とか、それよりも生活費は大丈夫なのか？

だが、そんなボクの心配をよそに母さんは笑顔で答えた。

「ばーか、アンタみたいな中卒のガキんちょを誰が雇ってくれるのよ。」

それもそうだ…

「でも…誰も働いてないのに大丈夫なのかよ。うち…」
と、そのとき…またまたタイミングよく電話がリンリンと鳴った。
ナンバーディスプレイを見ると「父ちゃんだ。」
受話器はボクが取り上げた。
「もしもし？父ちゃんか？」
「おお、犬雄～、どうだ？学校は楽しいか？」
「どうだ、じゃねーよ！父ちゃんに聞きたいことがある」
「んんん？なんだよ、急に…」
「父ちゃん、うち、大丈夫なのか？」
「だ、大丈夫って何がだよ」
「何が…って、金だよ、カネ！」
「金ぇ～？」父ちゃんが素っ頓狂な声をあげた。
母さんは、ボクと父ちゃんの電話のやりとりにはまるで関心がないようで、ポテチを食いながらテレビを見ている。
「そうだよ！我が家の生活費とか…誰も働いてねーのに大丈夫なのかよ！」
15歳でこんな心配をしなきゃいけないボクっていったい…
こんなけな気なボクの質問に、呑気な母さん以上に呑気な父ちゃんは、
受話器の向こうでガハハハハと大声で笑っている。
「何がおかしいんだよ！」
「犬雄！お前がそんな心配しなくていーんだよ！」
「…だって、心配するだろ！そりゃ」
「あのな～犬雄…」
父ちゃんが昔、何をしていたか知ってるだろ？と父ちゃんが聞いてきた。
「マ…マグロ漁師だけど…」
「そうだ、マグロ漁師だ。いいか、犬雄。お前は知らんかもしれんがマグロ漁師ってのは、めっちゃ高収入なんだよ。」
『めっちゃ』って…

父ちゃん、学校行くようになって変な若者言葉を覚えやがったな。
「でな…」父ちゃんが話を続ける。
「父ちゃんは、漁師時代にむっちゃ稼いでたから貯金がたんまりあるんよ」
「そ、そうなんだ…」
「だから、お前が心配することはない。大丈夫だ。」
「その言葉、信用していいんだね？」
「ああ、任せておけ！家族三人が二年は遊んで暮らせるだけの金はある！」

二年って…なんか微妙なんですけど

エピソード８　大いなる誤解

あれは、ボクが専門学校一年生の時の出来事だ。
夏休みを直前に控えた七月の中旬、調理技術専攻科の試験があった。
その日の試験の内容は、調理技術（野菜の切り方とか）の実地や筆記試験などだ。
筆記試験は、そこそこ自信があったのだが、手先が不器用なボクは包丁の扱いが
大の苦手だった。
だから、試験の前日、ボクは朝から苦手な大根の桂剥き（かつらむき）の練習をした。
大根を２０本ほど剥いたところでようやくマスターし、自信を持って試験に挑める
ようになった。

定時制クラスの授業は夜７時からはじまる。しかし、なぜか試験の日だけは夜８時
にスタートするのが慣例になっていた。
ボクは、夕方６時過ぎに母さんの帰宅と入れ替えで家を出た。
試験開始までまだ時間があったけど、早めに行って実習室で最終確認をするつもり
だった。
背中に背負ったリュックには大根とマイ包丁が詰め込まれている。
外は雨だった。
天気予報では快晴のはずだったのに…これだからツイテない男は嫌だ。

ボクは、駅までの距離を自転車で移動して、駅前の駐輪場に自転車を停めた。

この駅の改札は2階にある。ボクは雨の中、駐輪場から駅の階段を目指して走った。
その時だった。
「キャー！」と女性の悲鳴が聞こえてきた。
見ると、階段の踊り場で若い女性が尻もちをついて座り込んでいる。
この駅の階段は、階段部分には屋根があるけど、階段を降り切った場所、つまり
踊り場には屋根が半分までしかない。
しかもここの床はタイル貼りになってるので雨が降った時は、濡れて滑りやすくなるのだ。
その女性は、階段を下りてきたところで滑って転んだらしい。

いや、良く見ると女性…というよりは、女の子と言ったほうがいいのかもしれない。
その子は、たぶんボクより3つか4つぐらい年上だろう、まだ若い。
制服は着ていないけど、どう見ても高校生だと思われた。
「いった〜〜い…」その子は、まだ地面に座り込んだままだ。
ボクは、周りを見回したが辺りに人影はない。
その場に居合わせたのは、ボクとその子だけだった。
こんなとき、見て見ぬふりをして通り過ぎるべきなのか、それとも助けるべきなのか…
ボクは選択を迫られた。

【アンラッキーボーイ】を自負するボクとしては、こういう時、『善かれ」と思って
手助けすれば、たいがい裏切られて嫌な思いをするのは分かっている。
でも、男として（否、人間として）この状況下で見過ごす訳にもいかない…どうしよう。
誰か他にいないのかな…いない。

そのとき、転んだ彼女が自力で立ち上がろうとした。
ケガは無いようだ。なんだ、立てるじゃん。
ボクは内心ほっと胸を撫で下ろし、見て見ぬふりをして通り過ぎようと心に決めた。
そして足早に階段を上ろうとした時だった。
「きゃ！」また彼女がペタンと尻もちをついて座り込んでしまった。
今度は、その拍子にバッグからモノが飛び出して、踊り場のタイルに散乱した。
ボクの足元には、ピンクのケータイが転がってきた。
あ～あ…
せっかく素通りするはずだったのに、こうなっては無視する訳にはいかない。
ボクはそのケータイを拾い上げた。
ケータイは、濡れてしまっている。

ケータイって、濡れたらヤバいんじゃなかったっけ？
「大変だ！」ボクは、そのケータイを拭いてあげようと思いハンカチを探した。
だが、ハンカチはリュックの中にあることを思い出し、仕方がないのでビショビショ
のケータイを自分のTシャツでゴシゴシと拭いた。
おかげでお気に入りの白いTシャツが雨と泥汚れで茶色くなってしまった。
「すいません…」
気が付くと、その子は何とか自力で立ち上がれた様で、慌てて落ちたモノを拾い
あげている。
幸い、ケータイ以外のモノは屋根のある方へ転がったようで、被害は最小限で

済んだようである。（ボクのTシャツは汚れたけど…）
「はい、これ…」
ボクは、水分と泥汚れを拭き取ったピンクのケータイをその子に差し出した。
「濡れちゃったけど、大丈夫かな」
「あ、どうだろう？」
その子がケータイをパカっと開いて画面を見た。
何度かボタン操作をしてから「うん、大丈夫みたい。良かった。」
どうもありがとう、と小さく微笑んだ。
その時、はじめてその子の顔をまともに見たが、とっても笑顔が可愛らしい子だった。
やべ！このシチュエーションは恋に落ちるパターンのヤツなんじゃね～の？
なんて、一瞬アタマの中を駆け巡ったが、それは大いなる誤解だと、すぐにその考えを消し去った。

「ケガ…ないですか？」
一応、ボクよりは年上っぽいので、敬語で聞いてみた。
「うん…」その子は、自分の膝小僧に視線を移す。
転んだ時に強く打ったようで、真っ赤になっている。
血は出ていないようだが、なんだか痛々しい。
「あ、赤くなってる…」
「うん、でも大丈夫です。すいません」と、その子はぺこりと頭を下げて、その場から立ち去ろうとした。
しかし、すぐに足を止めてしまった。前かがみになって左の膝を押さえている。
「大丈夫？」ボクは近寄って声をかけた。
「いった～い…どうしよう…」その子が泣きそうな声を出した。

いったい、どうしよう…ボクも心の中で泣きそうな声を出した。
試験に備えて早めに出たのに、このままじゃ間に合わなくなるかもしれない。
かと言って、このままこの子を置き去りにする訳にも…
そんな時、ボクの目にあるものが飛び込んできた。
踊り場の隅に置かれた真っ赤なベンチだ。
コーラの自販機の隣に一台だけ置かれている。
背もたれの部分に『Ｃｏｋａ　Ｃｏｌａ』のロゴが描かれているヤツだ。
「あそこまで、歩ける？」ボクは彼女に声をかけた。
「あ、うん…」彼女は、ボクが指差したベンチを見ると、足を引きずりながら何とか
ベンチまで移動した。
そして、膝を曲げないように伸ばしたまま、ゆっくりとベンチに腰をおろした。
ここならギリギリ雨はかからない。
でも、とりあえず、ここに座らせたのはいいけど、どうすればいいのかな…
ベンチは大人が三人くらい座れる長さで、彼女は一番右端に腰を下ろした。
ボクも、座ろうと思ったけど、こういう時どんな距離感を保てば良いのか分からず
とりあえず彼女との間にリュックを置いて座ることにした。

「もう～なんで、アタシっていつもこうなんだろ」彼女が膝をさすりながら呟いた。
スカートもびしょびしょ…と、彼女は濡れたスカートの裾を気にしている。
見ると、薄いピンクのミニスカートが脇からお尻の方にかけて確かに濡れているようだ。

ミニスカートの中からは細い生脚が伸びているのが見えた。
ボクは慌てて視線を逸らした。
（ってことは…）と、良からぬ想像をしそうになったボクだが、それ以上の想像は
これからの試験に悪影響が出そうなので止めることとした。
「大丈夫ですか？」
ボクは、それ以外の言葉を見つけることが出来なかった。
そのとき、駅のホームから、間もなく上り電車が到着するとのアナウンスが聞こえてきた。
ボクが乗ろうとしていた電車だ。
まぁ、これを乗り過ごしても次の電車でも余裕で間に合うので、それほど焦りはない。

「もう、大丈夫だから…ありがとう」
ボクが、アナウンスに反応して時計を見たからだろうか…彼女が声をかけてきた。
「あ、はい。ほんとに大丈夫ですか？」
「うん、ここで少し休んでから行く…。ありがとう」
彼女は、そういってまた可愛らしい笑顔を見せた。
なんか、このままここにいると、いろんな意味で本当にヤバそうだったので、ボクは
後ろ髪をひかれながらもその場を立ち去ることにした。
「じゃ、気をつけて…」
とりあえず、それだけ言い残してボクは階段を一気に駆け上がった。
そして、階段を昇り切ったとき、またアナウンスが流れてきた。
いよいよ上り電車がホームに入ってくるようだ。
「よし、間に合うぞ！」
ボクは、急いで自動改札を通り抜けホームへ下りる階段を駆け下りた。
そしてホームに降り立つと、さっきのベンチが見える位置まで移動

してみた。

まだ居るかな…

――いた。

コーラの自販機の隣に茶髪の頭が見える。さっきの子に違いない。

まだ、動けずに居るのだろうか…

なんとなく気になって、このまま戻って声をかけようか？

そんなことを考えていると、ボクの目の前を電車が横切り彼女は視界から消えてしまった。

それと同時にボクの頭の中もリセットされ、本来の目的を思い出すことが出来た。

そんなことよりも試験だ、試験。

電車に乗り込み、反対側のドアの窓から外を見ると、さっきホームから見たよりも数メートル近くなっただけなのに、今度ははっきりと彼女の後ろ姿が見えるようになった。

彼女は、まだボクが勧めたベンチに座ったままだ。

ドアが閉まり、電車がゆっくりと動き出した。

ボクは、ずっと彼女の後ろ姿を目で追っていた。

そして、彼女の姿が柱の陰で見えなくなる瞬間、彼女は思い出したように後ろを振り返った。

明らかにこの電車の中に視線を送っているようだった。

もしかしてボクを探しているのかな…

しかし、それを確かめる術もなくすぐに彼女は見えなくなった。

いま確かに、彼女はボクの姿を探してたよな…。

気のせいか？ただの自意識過剰か…？

そんなボクの【大いなる誤解】を乗せたまま電車は徐々にスピードを上げた。

エピソード８　大いなる誤解（後書き）

犬雄、恋の予感？
エピソード９に続く！

エピソード9　大失敗

【それ】に気付いたのは、電車が動き出してから1分後のことだった。

電車が動き出し彼女の姿が見えなくなったボクは、しばらくの間、未練
がましく外を眺めていたが、試験の事を無理やり思い出し気持ちを切り替えた。
さっきの出来事は忘れることにしよう…。
さすがにこの時間の上り電車はガラガラだ。この車両にはボクの他に客は
数人しかいない。
ボクは、いつものように車両の一番端のシートにドカっと腰を下ろした。
そして、【それ】に気付き、すぐに立ちあがった。

あああああ！！！！

リュックがない！！！

さっきのベンチで彼女と自分の間に置いたリュックを、そのまま忘れてきて
しまったのだ。
マジかよ！ボクが思わず電車の中で声をあげると、車内の客、数人が一斉に
ボクの方を注目した。
次の駅で途中下車して戻らなきゃ！と思ったが、よく考えてみれば次の駅は

『旭日駅』な訳で、もともと降りる予定の駅だから途中下車とは言わない…。
さっき彼女が一瞬こっちを振り返ったのは、ボクがリュックを忘れたのに
気付いたからなのかな…。
旭日駅までは約８分。
田舎なので一駅の間隔が長いのである。

マジかよ…

我ながら自分のアホさを呪った。
これはツイていないと言うのだろうか？
ただ単に自分がアホなだけなのか…両方だな、きっと。
とにかく、旭日駅に着いたらすぐに下り電車に乗って戻ろう。
でも…
ボクは、時間の計算をしてみた。
今の時刻は、ＰＭ６：４３分
この電車が旭日駅に着くのは…だいたいＰＭ６：５０頃か？
ってことは、タイミング良く下り電車に乗れればＰＭ７：００にはあの駅に戻れる。
そこからリュックを取り戻して、すぐにトンボ帰りすれば…
「よし！８時からの試験には何とか間に合いそうだ！」

あ、いや…
でも、待てよ。
あぶないあぶない。
またアンラッキーのワナに騙されるところだった。
もし、戻ってみてリュックがなかったら？
リュックがあっても、次の上り電車がしばらく来なかったら？
う～～ん…やっぱり、戻るのにはかなりのリスクがつきまとう。

そんなとき、いきなり電車の速度が下がった。
…え？
いつもはこんなところでスピードが下がったりしないのに…
電車はどんどん速度を落とし、やがて完全に停止した。
そして車内にアナウンスが流れた。
「停止信号です。しばらくお待ちください」

おいおいおいおいおい！こんな時に、ふざけんなよ！

それから約１０分間、何の説明もないまま電車はその場に停車したままだった。
本当なら、もうとっくに旭日駅に着いてるはずなのに…。
いったい何があったんだよ？
さすがにボク以外の乗客たちもみな落ち着かない様子だった。
どうせこのまま動かないなら、ここで降ろしてくれないかな。
そんなことを考えていると、ようやく車内アナウンスが流れた。
「この先、旭日駅近くで建物火災が発生した模様です。消火活動の影響で
ただいま上下線ともに運転を見合わせております。お急ぎのところご迷惑をおかけいたしますが、いましばらくお待ちください…」

火事？そういうことか…。
雨の日にも火事なんて起きるものなのか？
それともこれもボクの『不運の力』のせいか？
我ながら大したものだ。
時計を見ると午後7時になろうとしている。
いよいよこれでリュックを取りに戻るのは厳しくなってきた。
それどころか、このまま電車が動かないと試験にも遅刻しそうだ。
あ、でも待てよ。
うちの学校は、この電車を使って通学している生徒が大勢いる。

きっと足止めを喰らってるのはボクだけじゃないはずだ。
火事で電車が止まって遅刻しても、これは不可抗力なのだから
大目に見てくれることだろう。
たしか、『遅延証明書』とかいうのを駅で発行してもらえばいいとか
聞いたことがある。
そうと分かれば、これは逆にチャンスかもしれないぞ。
もし電車が動いて旭日駅に着いてから急いでリュックを取りに戻って、
それが原因で遅刻したって『遅延証明書』を出せば許されるんじゃ
ないか？
といっても、すぐに電車が動き出せば…の話だが。

と、そのとき、またアナウンスが流れた。
『大変お待たせいたしました。間もなく運転を再開いたします…』
お！意外と早い運転再開だ。よし！これなら間に合うかもしれない。
それから2、3分後、ゆっくりと電車は動き出した。
そしてようやくボクの乗った電車は旭日駅に到着した。

15分近く遅れた影響で、駅にはいつもより人が多かった。
ボクが降り立った上り線ホームだけでなく、反対側のホームにも大勢の
人がごった返している。
「火事、向こうのホームから見えたんだって」
近くにいたサラリーマンが話しているのが聞こえてきた。
火事の現場ってそんなに近くだったのかよ。
そうか、だからこんなに人がいるのか。野次馬ね…
駅のホームの時計はＰＭ７：１３を指している。う～ん微妙だな…
戻ろうかな…。
下り列車に乗るには、一度階段を上り隣のホームに移動しなくては
ならないが、階段付近には、行列ができている。

なんだか向こうに渡るだけでも時間がかかりそうだな。
まぁ、とにかく改札も2階だからこの階段は上るしかないんだけど…。

やっとのことで改札がある2階へ辿りついた。
このまま改札を出て学校へ向かえば余裕で試験には間に合いそうだ。
でも、あのリュックがないと…
ボクは、そこでようやくリュックの中身のことを思い出した。
「…げ！そういえば」
まさか、あの子、リュックの中身見てないよな…。
あんなの他人にはとても見せられない。
包丁と…大根。
駅の構内では、ケータイで話している人たちが大勢見受けられた。
みんな電車が遅れたことや火事のことを口々に話している。

あ、そっか。

電話すりゃいいんじゃん。
なんで今まで気付かなかったんだろう。ボクは早速ケータイを取り出した。
リュックは忘れたけど、幸い財布とケータイはジーンズのポケットに入れていて
無事だった。
なるべく人が居ない場所を選んでケータイを開いた。
よし…

あれ？

で？どこに電話すりゃいいんだ？

えっと、とりあえずリュックなんだから、駅か？
落とし物として届けられているかもしれない。
旭日駅の駅員に『みのり台駅』の電話番号を聞こうと思ったが、駅員はなんだか
忙しそうで声をかけにくい。
仕方ないので１０４にかけて調べることにした。
番号はすぐに分かり、早速電話をかけてみた。

「はい、みのり台駅です。」
電話に出たのは、低い声のおじさんだった。
「あ、あの…、さっきそちらの駅に忘れ物をしたんですけど、届いてませんか？」
「え？忘れもの～？」モノは何？と低い声のおじさんが面倒臭そうに聞いてきた。
「あ、えっと…リュックなんですけど」黒いやつです。
「黒いリュック？ちょっと待ってね。」おじさんはそういうと近くにいた職員に
確認してくれているみたいだった。
電話口で「～さん、リュックの落とし物なんて届いてるぅ？」という声が微かに
聞こえてくる。
「あぁ
ああ、あのリュックかなあ？」更に微かな声でそんな声も聞こえてくる。
良かった！やっぱ届いてるみたいだ。あの子が届けてくれたのかな…
ボクは時計を見た。よし！まだ間に合うぞ。
しばらくすると、そのおじさんが再び電話口に現れてこう言った。
「もしもし？ちょっと確認なんだけど…そのリュックって、どこに忘れたか覚え
てますか？」おじさんが聞いてくる。

確かに必要な確認だ。もしかするとボクのとは違うリュックかもしれない。
「あ、あの…階段の下の赤いベンチです。」
ちょっと待ってね…と、おじさんがまた何やら確認をしている。
「もしもし？はい、確かにそのリュックならさっき届きましたよ」
やった！珍しくツイてるぞ！
「ありがとうございます！今から取りに行きます！」そういってボクが電話を切ろうとした時だった。
「ああ、ちょっと待って。取りに来るなら…」
な、なんだよ。…なんか、嫌な予感。
「駅前の交番に届けてありますから」という。
こ、交番かよ！
なんでついさっきの忘れ物がもう交番に行ってんだよ。
「交番、ですか？」ボクは聞き返した。
「はい、南口の駅前の交番分かりますか？」
わかるけど…
「そちらに届けてありますので、直接行ってください。」
なんだよ、面倒くせーな。
すると、タイミング良く遅れていた下り電車がホームに入ってくるとのアナウンスが聞こえてきた。
これに乗ればリュックを取り返しに行ける。時間は――なんとか大丈夫そうだ。
次の瞬間ボクは、ホームに続く階段を駆け下りて入ってきた下り電車に飛び乗った。

みのり台駅――
南口はボクがいつも利用しているのとは反対側の出口だ。
ボクんちは、北口を利用した方が近いので、普段南口に行くことは滅多にない。
久しぶりに降り立った南口の駅前は、昔から何も変わっていない。
タクシーやバスのターミナルがあって、北口よりは少しだけ都会的には見えるけど
通行人の姿はほとんど見えない。
そういえば、さっき電車を降りた時、例の赤いベンチを見たけどあの子の姿はなかった。
なんとか無事に出発できたみたいだ。
そりゃそうか…もう夜の七時過ぎてるしな。
交番は駅を出てすぐ目の前にあった。
周りはすっかり薄暗いのに、その交番の蛍光灯だけが白く光っていた。
中にはまだ若そうなお巡りさんが一人、机に向かって何か書き物をしている。
「あの～、すいません。」
ボクは恐る恐る声をかけた。
お巡りさんは、びっくりしたように顔をあげた。
「はい？」
「落し物を預ってもらってるみたいなんですけど…」
「落し物？」
「はい、さっき駅にリュックを忘れたんです。」
ボクがそう告げるとお巡りさんの表情が一瞬強張った。
「…リュック？」
「はい、黒いリュックです。北口のベンチに置いてきちゃって…」
お巡りさんは、しばらくボクの顔を不思議そうにながめていたが
「あ、そうですか…じゃあ、とりあえず中に入ってください。」
とボクを交番の奥に招き入れた。

早くしてよ～
と思いながらもお巡りさんにそんな事が言えるはずがなく、言われるままに奥の部屋に入った。
そこは、6畳ほどの大きさの部屋で、中央に簡単な応接セットが置いてある。
「そこに座って」お巡りさんが言った。
言われた通り、ボクは、手前のソファに腰を下ろした。
「ちょっと待っててね」お巡りさんは、そういうと部屋を出て行った。
早くボクのリュック持ってきてくれよ。試験に間に合わなくなる…。
お巡りさんが、ボクのリュックを持ってきて「これで間違いないか？」
と聞かれ、「これです」と言えば、形だけの受取りサインをしてすぐに
帰れるものだとボクは思っていた。
しかし、それは大きな間違いだった。
お巡りさんは、部屋を出たっきりなかなか戻ってこない。
耳を澄ますと、隣の部屋で誰かと話している。
相手の声は聞こえないのでどうやら電話のようだ。
「はい…はい…え、それで？…はい…」
会話の内容は分からないけど、なんだか深刻そうな声を出している。
なんかボク、忙しい時に来ちゃったのかな？

「お待たせして悪かったね…」お巡りさんが部屋に戻ってきた。
さっきまで被っていた帽子は脱いでいる。帽子の下は、ほとんどスキンヘッドの丸坊主だった。
テーブルを挟んでボクの向かい側のソファーにドサッと座り、手に持った何かの書類をしばらく眺めたあと「え～っと…」と視線をボクの

顔に移した。
ボクはなるべく目を合わせないようにうつむいてテーブルの端っこを見ていた。
「えっと…、二、三、質問していいかな？」
お巡りさんが事務的に言ってきた。お巡りさんとこんなに至近距離で話をするのは初めてだったので、何だかボクは犯罪者にでもなった様な
気分だった。
質問しないでください。
正直そう思ったが、ボクは黙ってうなづいた。
「えっと…」どうやらこのお巡りさんは『えっと』が口癖のようだ。
「あ、そうそう、まずはこのリュックね…」お巡りさんが立ちあがって
部屋の奥の棚から黒いリュックを持ってきてテーブルの上に置いた。
間違いなくボクのリュックだ。
「このリュックだけど…」お巡りさんが言いづらそうに口を開く。
「はい」
「それ、キミので間違いない？」
「はい、間違いないです。ボクのです。」
「そうか…あのね、それがさっきここに届けられてね」
「…はい」
「あ、初めは駅の事務所に届いたらしいんだけど…」
「は…はあ」
「駅の職員の人が、ここ（交番）に届けに来たんだ」
「…はい」
このお巡りさん、何が言いたいんだろう？
なんだか話が面倒な方向に向かっているような気が…
「中身を見て、不審に思ったらしい」
ゲゲ！
そうか…そういうことか！

「…あ。」ボクは思わず言葉を失った。
「このリュックの中身なんだけど…」
「あ、はい」
「何が入っていたか覚えてるかな？」
「えっと…」お巡りさんの口癖がボクに感染した。
「大根と…」ボクは観念して白状した。どうせ中身見てるんでしょ？
「うん、大根と…？」お巡りさんが復唱する。
「…包丁です。」まったくボクは何て馬鹿なヤツなんだろう。
この時ようやく事の重大さに気付いてしまった。
「そうだね、確かにこのリュックには大根と包丁が入ってるね。」
「あ、はい…。」
お巡りさんの質問（というか、これって尋問？）は徐々に核心部分に近付いている。
「ちょっとこれは問題なんだよね…」お巡りさんが身体を起こしてソファーの背もたれに身体を預けた。
ほとんどスキンヘッドの頭に蛍光灯の光が反射している。
問題…って、大根と包丁どっちだろう？
とボクが馬鹿なことを考えていると
「まぁ、大根は別にいいんだけどね…」とお巡りさんが苦笑いした。
…ですよね。
だったらスーパー帰りの主婦はどうなる？
「問題なのは、包丁のほうなんだよ」
「はい」
いったいボクはどうなってしまうんだろう？
やっぱりツイテない。
このままリュックを置いて部屋から逃げ出したくなった。
でも、もちろんそんな勇気はボクにはない。

「【銃刀法違反】って言葉知ってる？」
お巡りさんがいきなり切り出してきた。

「じゅ、銃刀法って…あの…」ボクは違います！そんなつもりでは…
ボクがシドロモドロになっていると
「とりあえず、キミの名前教えてくれるかな？」
と本格的な『取り調べ』がスタートした。
こうなっては、もう試験どころではない。
何とかしてボクの疑いを晴らさねば！
「え？あ…名前…ですか？」
「そう、キミの名前」お巡りさんは、メモ用紙を取り出しペンを
握りしめている。
「まず、名字から教えて」キター！！
「う、うしやま…です。」
「はい、えっと、うしや…え？ウシヤマ？」ペンを持つ手を止めて
お巡りさんがボクの顔を覗き込んだ。
「はい、牛山です。」
「あ、そう。『ウシヤマのウシ』は、家畜の牛でいいのかな？」
「…はい」家畜って、他に言い方あんだろ！
「はい、で、下の名前は？」
この流れ、めっちゃ言いたくないんですけど…
ボクが黙っていると「どうしたの？下の名前も教えて」
お巡りさんがペンを片手にチラッとボクの顔を見てすぐに視線を落
とした。
「い…いぬお、です。」
お巡りさんの動きが止まった。そして
「いぬ、お？」今度はメモの上に視線を置いたまま聞いてきた。
「はい、『イヌオのイヌ』は動物の犬です。んで、『イヌオのオ』
は…」
「『男（おとこ）』、かな？」お巡りさんが途中で口を挟んできたので
「違います」と、ボクはキッパリ否定してやった。
それじゃ【犬男（いぬおとこ）】になっちゃうだろ。
いくらなんでもそんな名前は…

「じゃあ、雄雌(おすめす)の『雄(おす)』かな？」
「あ、そうです。そうです。」
「はい、え～っと、いぬおくん…っね。」イチイチ声に出さないでください。
「牛山犬雄くんか…」変わった名前だね。と言われた。
大きなお世話です。
「オス犬って意味なのかな？」と、お巡りさんはボクの名前に興味津々だ。
アンタ、『犬のおまわりさん』か？

でも、そう言われればそうだ。
『犬雄』はひっくりがえせば『雄犬』なのか。
雄犬(おすいぬ)も犬男(いぬおとこ)も大して変わんないか…
ボクは改めて自分の名前にショックを受けた。
と、そんなことはどうでもいい。（今は）
問題はこの先だ。
お巡りさんに、名前のあと住所を聞かれ、そのあと…
「年齢は？」という、当たり前の質問だけど、ボクにとっては非常に困る
質問を投げられた。

話しは逸(そ)れるけど、実は…ボクは年齢をごまかして専門学校に通っている。
本当の年齢は中卒すぐなので１５歳である。
でも学校では高卒の１８歳ってことになっている。
もちろん、これはボクの本意ではない。父ちゃんが勝手にそういう事で理事長と
話を付けてきたのだ。
「そんなの、すぐバレるに決まってんだろ！」と思っていたが、ボクの体格のせ

いか意外や意外、いまのところ誰にも気付かれていない。
このあと、リュックの中身の説明をするにあたり、学校の話は避けて通れない。
ボクは半分やけくそになって「１８です。」と嘘の年齢を告げた。
「１８？」お巡りさんの反応は判りやすかった。眉間にシワが寄り、ついでにスキ
ンヘッドにも縦ジワが入った。
明らかに疑っている。やっぱりお巡りさんの眼はごまかせないのか…。
「へ～、二十歳過ぎてると思ったけど、意外と若いんだね…」
お巡りさ～ん！そりゃないでしょ～？
でも、ボクは、とりあえず年齢詐称がバレずに済んだことにホッとした。
（あまり嬉しくないけど…）
「ははは…よく老けてるって言われます。」ボクは苦笑いをしてみたが、お巡り
さんは無表情のままだった。
「未成年かぁ…」お巡りさんが天井を仰いだ。
参ったな…と溜め息混じりに独り言を呟いている。

え？未成年だと…なにか問題でも？
お巡りさんは、天井からボクの顔に視線を戻して質問を続けた。
「１８ってことは…高校生？あ、大学生？」
「専門学校生です。」
「あ、そっか…。専門学生ね。で？なんの専門学校？」
ボクにやっと弁明の機会が訪れた。
「料理です！」

エピソード９　大失敗（後書き）

どうなる犬雄！　エピソード１０へ続いてしまう！

エピソード１０　事情聴取

「料理…の専門学校？」
お巡りさんが上目遣いでボクの顔を覗き込んだ。
「はい、そうです！いま一年生です。」ボクは目を逸らさないでキッパリと答えた。
そうか…お巡りさんは独り言を呟きながら身体を起こした。
「じゃあ、学生証見せて」げ！そう来たか。ヤバイ…
ボクは普段、学生証なんて持ち歩いていない。
学生にとっての学生証は、大人にとっての免許証みたいなもので、こういうとき
身分証明書になるんだろうけど、歳をごまかして入学したボクにとってはそうじゃない。
だから学生証は自宅に置いたままだ。
「学生証は持ってません。」ボクは、そう答えると無意識に壁の時計に目をやった。
時計の針は７時４３分を指している。もう８時からの試験は絶望的だ。
ボクにつられてお巡りさんも時計をチラッと見て「あぁ、もうこんな時間か…」
と呟いたが、だからと言ってこの『取り調べ』をやめる気はなさそうだ。

「学生証、ないんだ…」
「はい。家に置きっぱなしで…」
「そっか、じゃあ…」
あ、なんかこの展開、またまた嫌な予感がするんですけど。
「家の人に連絡取ってもらえるかな？」
…やっぱりそう来ましたか。

「え？ボクの親ってことですか？」
「うん、そう。だってキミ…未成年でしょ？」
「あ、まぁ、そうですけど…」
「なに？なんか都合悪いの？」
「え、あ、いや…そういう訳じゃ」
「じゃあ、連絡して」
心なしか、お巡りさんの態度がだんだん荒っぽくなっている気が…
「たぶん…連絡が付かないと…思うんですけど…」
「連絡がつかない？なんで？あ、お仕事？」
う！痛いところを…残念ながら我が家には『勤め人』は一人もいません。
ボクが家を出るとき、母さんはソワソワと何やら出かける支度をしていた。
きっとこの時間は家にいないはずだ。
でも、お巡りさんに嘘はつけない。
ボクは正直に答えることにした。
「えっと…母は、北口のパチンコ屋にいると思います。」
お巡りさんの顔色が曇った。
あ、やっぱりこれってマズかったかな？
「パチンコ屋…って、キミのお母さんはパチンコ屋で働いてるの？」
おお！そういう手があったか。
「あ、まぁ。そんなところです…。」
思わずこう答えてしまったが、母さんは半分パチプロみたいなもんだから
まんざら嘘でもないだろう。
「そっか…お仕事中か…」
お巡りさんは、ペンをクルクルと回しながら言った。
「はい。すいません」
「あ、いや、お仕事じゃ仕方ないよ。」
そう言っていただけると助かります。

「じゃあ、お父さんは？」
あ、そっか…そうくるよね。――普通。
「え～っと、父は…家にいないんです。」
お巡りさんの表情がより一層曇った。
「え、いない？」
「はい、実は…」
「母子家庭？」
ずいぶんストレートな聞き方をする人だ。
「いや、そういう訳じゃないんですけど…」離れて暮らしてるんです。
ボクは、少し悲しそうな声と表情を見せた。もちろん演技だ。
「あ、そうか。お父さんは単身赴任かな？」
ちょっと、否、かなり違うけど、そんなところです。
「あ、まぁ…そんな感じかな…」もう勘弁してください。
でも、こんなことで諦めてくれるはずもなく
「とりあえず、どっちでもいいから電話してみてよ」
ケータイ持ってるでしょ？と言う。
「は、はあ…」そうだよな。

ボクは、仕方なくとりあえず『母』のほうに電話することにした。
案の定、母さんは電話に出ない。
それでは、と父ちゃんのケータイにかけてみたが、こっちは電波が届かない場所
か電源が入っていない…という。
まったく、こんな一大事にうちの親は揃いも揃って何をしているのやら。
「すいません、どっちも出ません。」ボクはケータイをパタンと閉じて
テーブルの上に置いた。
そして「あの～、その包丁なんですけど…」と続けた。

お巡りさんはボクの目を黙って見つめている。
「学校の実技試験で使う料理道具なんです。」やっと本当のことが言えた。
お巡りさんはしばらく黙っていたが、ボクの説明を自分なりに解釈したようで
ゆっくりと口を開いた。
「なるほど、で？今日は試験だったの？」その目からはまだ疑いの色が消えていない。
「はい。そうなんです。」もう間に合わないけど…と、ボクは今度は本当に
悲しい顔をした。
「間に合わないって、もう夜の８時だよ。」お巡りさんは壁の時計と自分の腕時計
の時間を見比べた。
もちろん、お巡りさんの言いたいことは分かる。
「ボク、定時制のクラスなんです。」
「え？定時制？料理の学校にそんなのあるの？」

そこで、ボクは自分が通っている専門学校のことを事細かく説明した。
そしてようやくお巡りさんの顔から疑いの色が消えて
「そっか、そういうことだったのか…分かった。」と少し口元に笑みが浮かんだ。
よかった。これで釈放か、と思いきや
「事情は分かったけど、それはそれだからね。」とお巡りさんの無情な言葉。
理由はどうであれ、未成年が刃物を持ち歩いているのを黙って見過ごすことは
できないという。
まぁ、それはそうなんだろうけど…

「とりあえず、保護者の方に来てもらわないことには帰せないんだよ。」
お巡りさんが、ぶっきらぼうに何やら書類にかき込みながら呟いた。
「ケータイ以外にお父さんかお母さんに連絡取る方法ない？」
あったらこっちが聞きたいです。
その時だった。
突然、ボクのケータイがテーブルの上でブルブルと震えた。
その音にボクもお巡りさんも一瞬心臓が止まりそうになった。
「あ～ビックリした！誰から？」お巡りさんがボクのケータイを覗き込んだ。
「あ、母です！」
ボクからの着信履歴を見てかけてきたのだろう。
ボクは急いでケータイを開いて通話ボタンを押した。

「モシモシ！」
先に声を出したのは母さんのほうだった。
母さんの背後からは、賑やかなＢＧＭが聞こえてくる。
やっぱしパチ屋か？
「犬雄！あんたどこにいるの！？」
珍しく母さんは慌てた声を出している。
どこにいる…って、それを聞きたいのはボクのほうだ。
「母さんこそ、何処にいるんだよ！」
しかし、母さんはそんなボクの質問などお構いなしに声を荒げた。
「犬雄！父ちゃんが大変なんだよ！」
「はあ？父ちゃんが大変？」
それよりボクのほうが大変なんですけど…
「父ちゃん、どうしたんだよ？」
「父ちゃんが、病院に運ばれたって！いま、病院から連絡が！」
こんなに取りみだした母さんは初めてだった。
ボクのケータイから漏れた母さんの怒鳴り声が聞こえたのか

お巡りさんも、のっぴきならない様子だと悟ったらしく
『電話を変わろう』とボクにジェスチャーをして見せた。

エピソード11　大変だ！

催促されてボクはケータイをお巡りさんに渡した。

お巡りさんが、完全に冷静さを失っている母さんとどんな会話をしたのか

知らないが、噛み合わない会話を1分ほどしてから電話を切った。

というか、一方的に切られたようだ。

そしてお巡りさんはボクにケータイを返しながら

「お母さん、やっぱり北口のパチンコ屋にいたみたいだね。」

「は、はあ…それで？」

「いますぐこっちに来るそうだ。」

「そ、そうですか…」

あ、そういえば

「父ちゃ、あ…父が大変だとか言ってましたけど…」

「あ、うん。そうらしい。救急車で運ばれたとか…」

母さんはだいぶ取りみだしていたので、詳しいことまでは

さすがのお巡りさんも聞き出せなかったという。

救急車で運ばれた？

それは大変だ。

どうりでケータイが繋がらない訳だ。

「マジっすか！？で、父ちゃ…父は大丈夫なんですか！！」

「う～ん…それが…お母さん、だいぶパニくってて何言ってるか

よく分からなかったから…」とお巡りさんもバツが悪そうだった。

要領を得ないお巡りさんに痺れをきらしたボクは、もう一度

母さんに電話をかけたが、何度呼び出しても母さんは電話に

出なかった。

そのときだ。

「いぬお！！」

母さんが息を切らしながら交番の前に現れた。

肩を上下に揺らして仁王立ちしている。

「か、母さん！」

「犬雄！あんた、こんな所で何やってんのよ！」

「え、あ、ああ…何をって…」

いったいどこから説明すればいいんだろう？と考えていると

お巡りさんが助け船を漕いでやってきた。

「まぁ、お母さん、落ち着いてください。」

母さんは、お巡りさんのその言葉で、初めてそこに他人が居たことに

気付いたらしく、驚いてお巡りさんの顔に視線をやった。

「あ、お巡りさん…。こんばんわ」

とっさに母さんの口から出た言葉が『こんばんわ』だったことに

ボクは思わず笑いそうになったが必死で堪えた。

…と、そんな場合ではなかった。

「お母さん、いったいどうされたんですか？」

先に質問したのはお巡りさんだった。

こうなっては、もうボクの銃刀法違反どころの騒ぎではない。

母さんは肩を上下に揺らしながら呼吸を整え、やっと声を出した。

「…火事よ、火事！」母さんはそう言うと唾を飲んだ。

「火事？」

「そうなのよ！お父ちゃんのアパートが火事になって…それで、お父ちゃん病院

に運ばれたって」

母さんは真っ青な顔をしている。

そのとき、ボクはついさっき電車の中で聞いたアナウンスを思い出

した。
『旭日駅前で建物火災がありました…云々』
あれは父ちゃんのアパートのことだったのか！
そうと分かれば、こんな所で油を売っている場合じゃない。
一刻も早く病院に行かなければ！
と、そのとき、お巡りさんが母さんに声をかけた。
「お母さん、落ち着いてください。ご主人が運ばれた病院はどこですか？」
おお！そうだ。さすがお巡りさん。冷静かつ的確な質問だ。
「そうだ、母さん！どこ？」
ボクもお巡りさんに追随して母さんに迫った。
しかし母さんの頭の中はスクランブルエッグ状態で、質問の意味すら理解できず
にいるようだった。
えーっと、えーっと、を繰り返している。母さん、それはこのお巡りさんの口癖
だよ。
「母さん、父ちゃんはどこの病院に運ばれたんだよ！」ボクは母さんの両肩に手
を置いてもう一度聞いた。
すると、今度はそんなボクの肩を誰かがポンポンと叩いた。
ふり返るとお巡りさんと目が合った。
いつの間にかけたのか、お巡りさんは電話を耳に押しあてて誰かと話をしている。
はい、はい、と電話口で返事をしながらボクにアイコンタクトを送ってきた。
それが『いま確認中だからいいよ』って意味だというのがすぐにわかったので、
ボクは母さんの肩から追及の手を離した。

お巡りさんはすぐに電話を切り、ボクと母さんに向き直ってこう言った。
「病院が分かりました。旭日第一病院です。」
お巡りさんがそのことを誰に聞いたのか知らないが、警察と消防なのだから、
それなりのネットワークがあるのだろう。

旭日第一病院…あ、あそこか。
ボクにはすぐにピンときた。なぜなら、その病院はボクが（ボクたち親子が）通う
学校のすぐ近くだったのだ。
「母さん、すぐに行こう！」母さんの腕を掴んで交番を飛び出そうとしたボクの
腕をお巡りさんが掴んだ。

「ちょっと待ちなさい」

あ、やっぱり？
このどさくさに紛れて無罪放免になるかなぁと内心企んでいたボクだったが、
やっぱりお巡りさんに引き留められてしまった。

「はい？」こんなときに何か？とでも言いたげに、とぼけて返事をしてみると、
お巡りさんが意外なことを言い出した。
「病院まで送りますよ」
電車より早いから…と交番の外を指差している。
外は真っ暗だった。南口の駅前ロータリーには、いつ来るか分からない客を待つ
タクシーが３台並んでいて、その近くのベンチには、３人の運転手

がタバコをふ
かしながら暇そうに話をしている。
その他に人影は見えない。「送るって…タクシー？」ボクが呟くよ
うに聞くと、
暗かった駅前ロータリーが突然真っ赤な光に照らされた。一台のパ
トカーが赤灯
を回転させながら近付いてきたのだ。
パトカーは、ゆっくりと速度を落として音もなく交番の前で止まっ
た。
運転席から、白いヘルメットを被った若いお巡りさんがこっちを見
ている。
「さぁ、乗って」お巡りさんに声をかけられ、ボクと母さんは言わ
れるまに
そのパトカーの後部座席に乗り込んだ。
そして、お巡りさんも助手席に乗り込む。
運転席のお巡りさんは、突然ボクたちが乗り込んできたのに驚いて、
ヘルメット
のつばを持ち上げながら「この人たち何なんですか？」と助手席に
向かって言っ
た。
「説明はあとだ。旭日第一病院に急行しろ」口調からして交番のお
巡りさんは、
このヘルメットよりも先輩なのだろう。
先輩の命令を受け、ヘルメットのお巡りさんは「了解」と短く返事
をした。
そしてパトカーは勢いよく走り出した。

お巡りさんの言うとおり、電車で行くより断然早かった。
交番を出発して１０分ほどで、父ちゃんが運ばれたという『旭日第
一病院』に到着

することが出来た。
途中、車内では、交番のお巡りさんが運転席のお巡りさんに事情を説明してくれ、
ハンドルを握る後輩らしきお巡りさんは、「そうですか～」と状況を察して、なんと
サイレンまで鳴らしてパトカーを飛ばしてくれた。
これには、さすがにボクも母さんも面喰らったが、おかげで渋滞も赤信号も関係なく
病院に到着し、ボクたちはお巡りさん達へのお礼もそぞろに病院内へかけ込んだ。

初めて足を踏み入れた夜の病院は、電気が消され真っ暗だった。
受付は当然のごとく閉まっている。ボクと母さんはキョロキョロしながら廊下を
進んだ。
その廊下の一番奥に1ヶ所だけ白く光る案内板が見えた。『夜間・救急受付』と書いてある。
「母さん、あそこだ！」
ボクはそういうと、廊下をなるべく音をたてないように気を使いながら走った。
受付には、白衣を着た中年の男性が一人、伝票のようなものの整理をしていた。
「すいません！さっき駅前の火事で運ばれた者の家族なんですけど」
ボクは、受付の男性に言った。
男性は「あ、はい。お名前は？」と聞いてきた。
「牛山です。牛山竜馬です！」答えたのは母さんだった。

そう、ボクの父ちゃんの名前は『牛山竜馬』という。
名前だけを聞くと、歴史の教科書のどこかに出てきそうな名前だが、実物は

（我が父ながら）そんな大そうな人物ではない。
父ちゃんが言うには、名前に動物を入れるのは牛山家の伝統とのことだが、竜馬なんて
かっこいい名前ならいいけど『犬雄』はどうなのさ。
その前に、名字に牛がいるんだからいいじゃない。

ボクと母さんはエレベーターに乗って受付で案内された病室へ向かった。
３０６号室…父ちゃんの病室を探しながら、ボクと母さんは３階フロアを迷走した。
旭日第一病院は、この辺りでは一番大きな総合病院だ。３階だけでも相当な数の病室
があって、３０６号室がなかなか見つからない。
ナースステーションを見つけたボクは、「すみません。３０６号室はどこですか？」
と声をかけた。
すぐに若いナースが出てきて「案内します」と言ってくれた。
ボクたちがさまよっていたのは『南棟』と呼ばれる病棟だったらしく、父ちゃんがいる
３０６号室は『東棟』にあるらしい。どおりで見つからないはずだ。

ナースの後について南棟から東棟へ移動した。途中長い渡り廊下を通って、何度も
右へ左へ廊下を曲がり、ようやく辿りついた。
「３０６号室はこちらです。」
ナースが病室入り口にあるネームプレートを右手で指して言った。
「ありがとうございました。」ボクと母さんは深々と頭を下げた。
ネームプレートには、確かに【３０６】と書かれている。そして、そのすぐ下には
『犬山竜馬』と見慣れた名前がマジックで書かれていた。

他に患者の名前はない。
というか、このネームプレート自体、入院患者の名前を書くスペースが一人分しかない。

――個室。

ボクは、このとき初めて全身の力が抜けて行くのを感じた。
個室って、まさか。
父ちゃん、そんなに悪いの？
一瞬、ボクの脳裏に暗い思い出がよみがえってきた。

そう、あれはボクがまだ小学生のころだった。
ボクの母さんの母さん。つまり、ボクのおばあちゃんが重い病気になって入院した。
末期のガンだった。
ボクは入院中、何度となくお見舞いに行ったけど、はじめおばあちゃんは6人部屋に
入院していた。
それが、病気が徐々に進行するにつれて、おばあちゃんの体力もだんだんと衰えてきた。
そして、いよいよとなった時、おばあちゃんは『住み慣れた』6人部屋から個室へと
移ったのだ。
おばあちゃんが亡くなったのは、それから間もなくのことだった。
あれ以来、ボクの中で病院の個室は『いよいよの時に入る部屋』というイメージしかない。
これは、ボクの母さんにとっても同じだったようで、母さんはナースが「どうぞ」と
言ってもなかなか病室のドアを開けようとしなかった。
普段、ちょっとのことじゃ動じない母さんだが、さすがに今回ばか

りは弱弱しく見えた。
犬山家の長男たるもの、ここで男を見せねばならぬ。とボクは、すっかり力が抜けた
身体にもう一度血液を循環させて気合を入れ直してから「母さん、開けるよ」と、
母さんの背中を軽く叩いたあと個室のドアノブに手をかけた。

個室の大きなドアは意外なほど軽かった。
緊張して力の入れ具合を間違えたボクは、必要以上の力でドアをスライドさせてしまった。
ガララララ！！！と静まり返った病院内にすごい音が響き渡った。
そして、まるで『道場破り』のような勢いでドアを開けたボクの眼に飛び込んできたのは
信じられない光景だった。

エピソード１１　大変だ！（後書き）

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0669o/

アンラッキーＢＯＹ

2011年10月6日18時40分発行